

「JENESYS2017」中国青年メディア関係者代表団第2陣 参加者の感想（抜粋）

第1分団（医療）

◆第1分団は（株）タニタ、（株）ニッポン放送を訪問し、静岡県庁でブリーフを受け、袋井総合健康センターや静岡新聞社・静岡放送を見学した。主なテーマは医療、健康、老人介護、そしてメディアである。

一週間にわたる視察や学びを経て、日本は医療健康制度が整い成熟しており、住民が健康保険と介護保険の保険料を納めれば、全体的に恵まれたサービスを受けられるということがわかった。また、日本の社会福祉部門では、国民の健康状況や疾病傾向に関する研究と分析を行うことにより、国民の健康増進意識を向上させ、定期健診の受診を促し、疾病の発生や症状の重症化を防いでいる。しかし、保険料が高いため、家計への圧迫、安心感の欠如などの弊害を生み出し、特に若い世代に不安をもたらしていると感じた。

二カ所のメディアを訪れて、日本のメディアは伝統的で保守的な傾向が強く、設備も新しいとは言えないと感じた。ただ、彼らはみなすべてのジャンルの番組をたった一チャンネルで放送しており、番組制作の面でも制限が厳しく緻密である。この点に関しては中国とは大きく異なっている。中国のBTVを例に挙げてみると、市レベルのテレビ局だが、ニュース、青少年向け、サイエンス、子供向けなど14ものチャンネルを持っており、各チャンネルで少なくとも5つ以上の番組を放送し、5,000人もの職員が働いている。また、今回の訪日で、日本の伝統メディアも中国のそれと同じくネットのニューメディアの台頭にさらされており、調整や改革、新たな発展の道筋を探ることが必須で、そうでなければ活力を失い生き残れない所に来ているのだということがわかった。

文化の面では、日本の伝統工芸品の中には非常に参考になる事柄が多いと感じた。中国も日本も非物質的な文化遺産を多く持っているので、良好な交流ができるのではないだろうか。

また、一番すばらしかったのは日本のきれいな空気だ。どこへ行ってもとても清潔できちんとしており、私たちが学ばなければならないのはやはりこの点であると思う。

◆今回の視察は大変印象深かった。企業やメディアの訪問を通じて私を感じたことは以下の通りである。

1. 中小企業の担当者。日本の中小企業は日本経済の支柱とも言うべきもので、規模の大きさにかかわらず、とても実直にしっかりとした考えを持って経営されている。例えばタニタの場合、初期の体重計から今日のハイテクを内蔵した体組成計など、新商品の研究開発をしているが、これは多くの仕事熱心な社員たちが共に努力を重ねて実現した経営の賜物である。

2. 伝統を受け継ぐ匠の精神。砂町銀座商店街で老舗の靴屋を取材したときも、電車を乗り継いで行った銀座近くの炉端焼きの店でも、同じようにそこで代々受け継がれてきた伝統を感じさせてくれた。彼らは何をするにも心をこめて、一つ一つの仕事に実直かつ丁寧に打ち込んでいた。靴屋の主人は御歳78歳だが、パソコンを用いた靴のデザイン設計を学び、時代と共に歩むことで自身の何十年と積み重ねた技術を絶えず発揚し続けている。

3. 全国規模で国民の健康増進をうたっている。東京でも静岡でも、政府と自治体は市民を巻き込む方法を考え、ウォーキングなどを奨励し、その他様々な手段で全住民が参加できるよう工夫しており、非常に効果も上がっている。

4. 細かい点まできちんと把握し、強い責任感を持っている。
5. 時間をよく守る。
6. 秩序をよく守る。
7. 公共の場が静かで清潔である。
8. ごみの分別が徹底されている。

◆ 1. 日本は非常に清潔な国である。駅や公共の場所など、どこへ行っても清潔さがきちんと保たれているのは衝撃的だった。

2. どの訪問先へ行っても資料などがきちんと準備されていて、誠意が感じられた。また資料も図表やグラフ、時には漫画など様々な表現方法で作成されていて、文字だけの資料よりも興味をそそられた。

3. 日本の高齢者への健康対策はとてもよいと思った。ウォーキング計画の呼びかけは面白く、特に歩いて歩数を稼ぐことでポイントが得られ、また獲得したポイントを駅や学校などの公共施設に寄付することも可能、といったやり方は学ぶに値すると感じた。

第2分団（教育）

◆ 今回の視察で感じたのは、日本の学校教育は自由で、生徒への進学のパレッシャーも中国ほど強くない、ということだ。例えば、金沢辰巳丘高等学校では、卒業生の20%は就職するとのことだが、中国では95%が大学へ進学し教育を受ける。中国の生徒の机の上は教科書や本が山積みなのだが、日本の生徒はそうでもない。また、日本では異動などがあり、教員のバランスがとれているが、中国の教員はほとんど決まった場所での勤務となる。日本では、例えば調理実習や被服など生活技能に関する科目が高校でも設けられているが、中国の学校ではほとんど見られない。日本人のごみの分別意識、道路の舗装状況、マナー、サービス、ホテルでの対応などどれも高度なレベルに達していて、他の国々も学ぶべき価値があると思う。

しかし一方で、日本にも改めた方がいいと感じる点がいくつかあった。人々は昼休みになってもほとんど休憩を取っていないように見えたが、これは健康に悪い。仕事のストレス解消には適度にそれを吐き出し、自分を解放する時間が必要だ。日本人の仕事に対する生真面目さは賞賛に値すると思うが、細かい部分ではもっと臨機応変に、時と状況によって調整してもいいのではないだろうか？日本の大型商業施設は閉店時間が早すぎる。これでは人々の生活リズムと合わないだろうし、もっと遅くしてもよいと思う。それから観光立国としては、国民全体の英語と中国語のレベルの向上が待たれる。この分野での人材の育成に力を入れるべきだと思う。

◆ 7泊8日の日程で、代表団一行は、メディア機関、学校、観光スポットなどを視察し、全面的に日本文化を体感した。その中で、特に印象深かったのは「緩急」の一言だ。具体的には以下の通り。

「急（＝速い）」というのは、日本はリズムが速く効率のよい社会だということだ。地下鉄の駅のショップでは日用品からギフトまで売っており、仕事に忙しいサラリーマンもここで買い物ができる。時間というコストを節約できる。スーパーの惣菜売り場でも惣菜は様々な分量に分けて売られており、お客は選択に迷わずに済む。また、丁寧に包装されているので、主婦も洗うのに手間がかからない。中国では、蟹は生で売られているが、日本では茹でたものも売られている。商業コミュニティは周辺住民にとって便利な存在だ。日用品からビジネススーツ、カギ修理店、マッサージ店など、日常の生

活はこの商業コミュニティにあれば大抵事足りる。こうした便利な生活インフラのおかげで、人々は時間を有効利用できる。

「緩 (= ゆっくり)」というのは、わが国の著名な作家が語っているように、日本というのは緻密さを追い求める国柄だということだ。金沢で日本料理を食べたとき、テーブルの上には小鍋、汁椀、飯椀など十種類以上の器が並んでいた。これを見たとき、洗うのがさぞ大変だろうな、と思った。夜、私たちは金沢の街中を散策した。居酒屋はスーツに身を包んだ男女のサラリーマンでいっぱい、おしゃべりに興じたり挨拶したりしていた。日本でも中北部に来ると、生活のリズムはゆったりしているようだった。

少し残念だったのは、今回日本の一般家庭にお邪魔できなかったことだ。彼らがニューメディアをどのように使っているのか、またどんな生活習慣を持っているのか、ぜひ知りたかった。

◆ 1. 謹厳実直。訪日期间中、一度もミスマッチ、遅延、延期といったトラブルに遭わなかった。自分も中国にいるときに似たような活動に協力したことがあるが、受け入れ先部門が大きすぎるためか、あまり深みがないと感じることが多い。日本の場合は、たくさんの人たちと接触したが、どの人も受け入れに関する自分の仕事を少しもおろそかにせず、協力するパートナーとして誠実に迎え入れ、私たちに丁寧に接してくれた。

2. 清潔である。街路に落ちているのは落ち葉だけで、革靴も数日履いていても埃がつかない。空気中のPM2.5もレベル10以内に抑えられている。見えるところのみならず、見えないところまで清潔だとは、本当に衝撃的だった。

3. 自信。自分はこれまで海外の十数カ国取材しているが、多くの国々が外国人記者に対して明確な規則を提示してくる。例えば中央アジアの某国では、外国人は毎日必ずホテル側から宿泊証明書の提供を受けなければならず、そうでないと出国できない。西アジアの某国では、街中では自由な撮影は許されない。もし軍の関連施設でも撮影しようものなら、投獄されることすらあり得る。北アフリカの某国では必ず現地の人間のアテンドがないと行動できないし、他の国でも無線受話器に対する厳格な規定があったり・・・。それに比べて、日本人は本当に自信を持っている。一人一人を尊重するという基礎の上に、私たちは自由に撮影し、取材ができる。何の事前準備もないことこそ、日本の自信と懐の大きさの表れだと思う。

◆ 今回の訪日交流活動で、まず私が感じたのは日本の多彩な伝統文化、バランスの取れた社会の発展、秩序立って運行される交通機関などであった。

次に、日本文化の中には伝統的な儀式が多く残っており、またそこに内包される意義や意味も非常によく継承されていると感じた。なおかつそこには中国との共通点も見えて取れることがわかった。例えば、中国の「相声」と日本の「漫才」。どちらも両国の中でのすばらしい伝統芸能であるが、絶え間なく発展する過程でテレビ向けの芸能へと進化し、時代の新しさを取り入れ、新鮮なテーマと内容で再び若い世代の支持を獲得したのである。同様に、中医学の継承と発展という分野でも、中日両国には非常にたくさんの共通点を見出すことができる。

三番目に、日本社会のバランスの取れた発展ぶりが強く印象に残った。しかしそれと同時に、行き過ぎた平均化で社会全体の欲望が低すぎるといった状況を招いてしまっているのではないかと、とも思う。人々の向上心、特に若い世代の向上心をそいでしまっているような気がして、少し心配である。

第3分団（食文化）

◆日本の和食文化における食器、特に美しく作られた箸に対して興味を持った。世界各国の食文化を知る手段の一つが食器であり、食器は飲食の方法、食べ物の形状、テーブルマナーなど多くの面を体現している。ではなぜ箸に注目したのか？それは、箸が中国の食文化でも欠かせない食器の一つであるからだ。しかし、日本の箸はデザインから美しい仕上がりまで、やはり中国の箸とは大きな違いがある。韓国の箸とも大いに違っている。その違いが大きいので、まず日韓の箸の違いから述べてみよう。韓国では食事をするのに銀の箸が好んで使われる。重くて食事中に音を立てることも多い。日本の箸は主に木で作られ、漆や金属で塗られている部分もあるため、比較的軽い。中国の箸は同じく木で作られていることが多いが、デザインの面では中国独特の図案を掘り込んで装飾する。例えば表面に竹を彫って緑色に色付けをしたりする。しかし日本の箸は色とりどりの漆が塗られ、その上に金粉や色鮮やかな嵌め込みを施したりして人々を惹きつける。これはもう中日食文化交流の「橋渡し役」になること間違いない。

今回のメディア機関の視察も印象深かった。例えば、神戸新聞社を訪れたとき、日本の多くのメディアは、生徒や学生に見学してもらい、彼らにより深くメディアという職業を理解させ、新聞社などのメディア機関への信頼性と親近感を高めてもらう努力をしているということがわかった。これは私たちが今後仕事をしていく上で参考に値することだと思った。

◆1. インターネットの普及に伴い、中日双方の新聞社は共に若い読者がどんどん離れていくという難題に直面している。中国では新聞の発展を調整し、積極的に伝統メディアとニューメディアを融合させていこうというやり方が多く見られる。日本では若い読者を育てていこうとするやり方が多いようだ。例えば朝日新聞社は面白い見学コースと解説を専門に設けており、一般市民、特に学生・生徒たちに紙面の制作過程を見てもらうなどしている。こうした方法は新聞と若者の距離を縮めるのに役立ち、大いに参考になった。

2. 日本酒や醤油といった多くの伝統食品産業は、今ではみな工業化された生産方式を採用し、手作りによる伝統的な生産方式は危機に瀕している。日本では工業化された生産方式を取り入れ生産量を確保しつつ、その近くに展示館などを設けて伝統的な生産工具や技術を展示し、またベテラン職人を配置して解説を行うなど、一般市民や観光客の伝統技術への理解促進に努め、売り上げを伸ばしている。

3. 日本の防災教育は非常によく行われており、メディアも防災知識の普及の上で大きな役割を果たしている。

4. 日本では節約の精神が根付き、非常に上手に資源を利用している。人々の環境保護意識も高く、ごみの分別は日本人の意識に染み付いている。

◆訪日期间中の交流と視察は、主に日本の伝統的な食文化と新聞メディアの発展という二つの分野に絞って行われた。

視察の中で、日本での伝統的な食文化の保護と継承が非常に印象深かった。築地市場は、卸売市場が時代の移り変わりと共に絶えず拡大しながら発展してきたそのプロセスを体現していた。一方、淡口醤油と日本酒作りでは、手作りから大規模生産に変わった後も、製造過程や技術の面で手作りの味を追い求め、それに近付けるべく努力し、資料館まで建設し、元来の製法の記録を保存している。新旧それぞれが交じり合う中には、その職業がいかに伝統を大切にしているか、また食を文化の一部分と

していかに尊重しているかが見て取れる。

朝日新聞社と神戸新聞社の視察では、異なるメディアの気質と、共通したジャーナリズム精神を感じた。朝日新聞社では、全国的なメディアとしてきちんと管理された運営の下での謹厳実直な雰囲気、一方の神戸新聞社では地域との密接な結びつきを感じられた。しかし両社共に、新聞のメディア人としてのプロ意識と新聞事業の中で絶えず何かを追求しようとする姿勢がひしひしと伝わり、深く印象に残った。特に、神戸新聞社の、阪神大震災後も休まず新聞を発行し続けた不屈の精神には、同じような大震災を経験してきた私たちにも大いに共感するものがあった。